雜　纂

戰術史上に於けるニコロ・マキアヴェルリの地位に就て

柴山英一

一　緒　言
二　軍事に關する指導原理
三　軍隊の種類、訓練、編成及び運用
四　火器の重要性に對する認識不足、及び、城砦構築に關する見解
五　結　語

一　緒　言

イタリーが産める大政治家ニコロ・マキアヴェルリ(Niccolò Machiavelli)の軍事に關する意見は其の名著「ローマ史論」亦は「君主論」に於ても多く散見する處であるが、「戰術論」に於て一層詳細綿密に所論を開陳して居る。つまり「戰術論」は「ローマ史論」や「君主論」に於て比較的簡單に述べられた處を更に敷衍擴充したものである。故に戰術家としての彼を理解するためには、如何にしても先づ「戰術論」に據らねばならぬのである。「戰術論」は實に彼の軍事知識の全能力を傾注した所産である。彼の後世に於ける名聲は殆んど「君主論」に基いてゐるが、彼自身最も重要視したらしいのは實に「戰術論」で

あつたのである。

「戰術論（原名 Dell' Arte della Guerra 英譯 Art of War）」七篇は彼がフローレンス滯在中（一五一九年—二〇年、五一歲—五二歲の時）ものしたもので彼の友人であり同時に保護者たるロレンツォ・ディ・フィリッポ・スッロッツィ（Lorenzo di Filippo Strozzi）に捧げたものである。此の作品は一五一六年にフローレンス郊外オリツェルラリ・ガーデン（Oricellarii Garden）に於て當代の名士コシモ・ルッツェルライ（Cosimo Rucellai）、ファブリッツィオ・コロンナ（Fabrizio Colonna）ツァノビ・ブォンデルモンティ（Zanobi Buondelmonti）、ルィヂ・アラマンニィ（Luigi Alamanni）等の間になされたとの假定の下に問答の形式をなして書かれてゐるのである。「戰術論」其のものに就ての研究は他日に讓るとして、本稿に於ては專ら同書を通じて彼の戰術觀を考察してみたい。

二　軍事に關する指導原理

彼の軍事に關する指導原理は「戰術論」の劈頭に於て頗る明快に述べられてゐる。卽ち曰く「イタリーに於て從來一般民衆生活と軍隊生活を分離したことは致命的失敗であつた。かくして兵士等は亂暴、脅迫を敢てし、以て凡ての平和的生活の敵となつたのである。故に吾人はローマ時代の古き組織に復歸することが肝要である。ローマは市民と軍人との間に何等の差異をも認めなかつた。而も兵士は寧ろ一般市民以上に忠實で神を恐れ、國家のためには常に死を覺悟してゐた。故にローマ時代の人間力（virtù）を是非とも現代に再現することを熱望する。それは決して不可能事とは考へられない。自分は軍人ではないが戰術に關する全知識を傾注し、以て祖國更生への一助としたい念願である。」と。

右の如く彼の理想は先づイタリー多年の陋習たる傭兵（カルタゴ戰役の終頃から起る）制度を打破して徵兵制度を布き、ローマ式國民步兵軍を樹立するにあつたのである。之こそ彼の「戰術論」の根本的原理であり其の大なる目的であつた。それは恐らく彼の全生涯を通じて確固不拔の持論でもあつたのである。彼は武裝的國民こそ唯一

の國民的無敵軍隊であり、且近代國家の眞の力であると確信してゐたのである。此の確信こそ彼の混亂錯雜した時代の必然的所産であつた。傭兵の不可に就ては「君主論」や「ローマ史論」にも述べてゐるが、「戰術論」の第一篇に於てファブリッツィオ・コロンナの口を借りて痛論してゐる。卽ち「戰爭を商賣にしてゐる傭兵軍の類は到底軍隊として眞の價値を發揮し得ないものである。彼等は必然的に慘忍不正直であり、平和の時代に在つても生活のために常に戰爭を欲し、狂暴なる行爲を敢てするに至る。かゝる狀態では國家は必然的に破滅の道を辿る外はない」と述べ其の實例を擧げて傭兵を排擊すると同時に、兵・農一致の徵兵制度を力說してゐるのである。事實彼の時代に於ては傭兵でなくとも此の種の危險は步兵の間に存在してゐた。中世の裝甲騎兵は殊にドイツ、フランスに於ては多くの場合貴族であつた。それ故に平時に於ては自費を以て生活する事が出來たが、之に反して步兵は戰爭を目的とする都會人や農民階級から構成されてゐたのである。同じく「戰術論」の第一篇に於て彼の代辯者ファブリッツィオ・コロンナと其の反對者コシモ・ルッツェルライの國民軍に關する應酬がある。後者は國民軍をこき下して曰く「貴下は多數賢明の士が既に無效なりと宣言し、亦事實粗惡な點に於ては試驗濟みとなつてゐるフローレンス國民軍を再建しやうと欲する。無論ローマ人は貴下が希望される如き方法で武備をなしたけれども結局彼等の自由を失ふに至つた。亦ヴェニス人と雖も國民軍を採用せず、佛王とても其の臣下をよりよく服從せしむる爲に軍備を縮少した。要するに賢明の士は國民軍を危險視するよりも、寧ろ之を無益なりとして非難してゐる」と。前者は之を反駁して曰く「斯の如き意見は軍事に關する正確な知識、純粹の經驗を缺ける人々に依てのみ主張され得ることである。事實凡ての國家は國民軍に立脚し、之に依てのみ外敵を防禦し得ることは吾々が歷史と體驗から敎へられる所である。若しヴェニス人が眞に此のことを理解して居たならば彼等は恐らくは新世界帝國を樹立し得たであらう。事實彼等は海上に於ては同胞を以て戰ひ、常に勝利を得たのであるが、陸上に於ては傭

兵を使用したために之に信頼することが出來なかつた。それに反して、ローマ人は遙かに賢明であつて、最初は陸戰にのみ訓練されてゐたのであるが、カルタゴ人に對抗されるに及んで急速に國民を海戰に訓練することに成功した。更に又フランス國民の如きは十分戰爭に訓練されず、主として傭兵に依頼したため、之卽ちフランス王國の弱き所以である」と述べて傭兵の不可、國民軍の效果を力說してゐる。

共和政治であれ君主政治であれ、國家の力は訓練された責任觀の强い武裝國民に依らねばならぬ。彼が滿腔の信頼を捧げた軍隊はかくの如きものであつた。而もよく訓練され强健な兵隊たるのみならず公的善のためには私的生活を犧牲にしても敢て厭はない軍人でなければならぬといふことを繰り返し絕叫してゐる。此のパブリック・ライフ (public life) のためにはプライヴェイト・ライフ (private life) を犧牲にすべきであるとの觀念こそは實に彼の思想の根幹をなしてゐるものである。「戰術論」の最終篇である第七篇に於て、彼はイタリーの諸君主に國民軍の確立を切望し、「若し諸君主が國民軍に就て不滿を述べる前に自分が主張する方法で國民軍を訓練されるならば、必ず全イタリーの支配者たることは疑ひを容れない處であり、やがてマセドニヤのフィリップ王の如くなられるであらう云々」と述べて國民軍の效果を力說してゐる。

更に彼は古代ローマ軍の機構、訓練法に就て檢討し、ローマの軍隊こそは理想的模範であるのみならず、他の追從を許さないものたることを確信するに至つたのである。此の信念は決して誤つてはゐなかつたのであつて、彼の時代の後尙數世紀間ローマの軍隊は凡ての偉大なる軍隊改革者の研究、讃嘆の對象として存在した。急激な砲術の進步した後に於ても尙ローマ軍は學ぶ處の多いモデルでさへあつたのである。

彼はローマの研究とスイス・ドイツ及びスペインの步兵に就て見聞した一切を統一・綜合して、模範的指導原理を發見し、理想的步兵を計劃し始めたのである。步兵の具體案に就ては後に述べることにするが、此の當代步

兵の改善案は屢々近代戰術家の是認賞讃を博したものである。プロシヤの有名な軍事專門家マックス・イェーンズ氏（Herr Max Jähns）も其の著「マキアヴェルリ及び一般兵役義務に關する見解」（Machiavelli und der Gedanke der Allgemeinen Wehrpflicht）に於て、讀者に對し先づマキアヴェルリといふ名前によつて起される正しき憤怒を抑制するやう懇願し、更に語をついで「自分はマキアヴェルリの道德的態度に就て話すつもりではない、寧ろ彼を最初の近代人として考へてみたい。彼は一般的兵役義務を其の軍事科學的研究の對象にしたのであつて、彼に對して近代的政治科學の創造者たる名稱を與へると同時に、其の軍事的知識に關しても同樣の敬稱を贈つても敢て差支へ無いと思はれる。彼こそは實に當代軍隊の重要性を認識し、其の改善法を力說した處の卓越せる天才であつた」と述べ、彼に對する讃嘆の辭を述べてゐる。

右に述べた處を綜合することによつて、彼の軍事に關する原理の何たるかは略理解し得ると思ふ。

三　軍隊の種類・訓練・編成及び運用

彼の理想とする軍隊の基礎は步兵であつた。當時ヨーロッパに於ては他のあらゆるものと同じく戰術は長足の進步を遂げつゝあつた。馬に乘り、頭から足元に至るまで武裝した中世の裝甲騎兵は彼等の巨大な槍に依つて如何に容易に步兵を破ることが出來たかを如實に示してゐた。イタリーが侵略されたのも此の裝甲傭騎兵のためであつた。それ故イタリーに於ては步兵は既に大なる不信用に陷つてゐたのである。然し乍ら十五世紀に至つてスイスの步兵は彼等の自由のために起ち、其の簡單な胸當と法外に長い槍を持つた突擊密集隊はオーストリヤとブルグンディの騎兵を破つたのである。其の結果步兵といふものは單に有力なる騎兵に對抗し得るのみならず、之に打ち勝ち得ることさへ實證されたのである。かくしてスイスの步兵は世界最良の步兵たる名聲を博するに至つたのであつて、最初に之を模倣したのがドイツ、次はスペインで、何れも大成功を收めたのである。此の後軍隊

の中心勢力は漸次歩兵に存する樣になり、從來非常に賞讃されてゐたフランスの騎兵ですら、も早歩兵に對しては打ち勝ち難く思はれる樣になつたのである。彼は此のスイスの歩兵に就て長い間研究した結果、あらゆる時代を通じて歩兵は軍隊の骨子であることを確信するに至つた。故に其の組織、訓練に於ては最大の注意が拂はるべきであるとなし「アジヤ洲の或る部分の如き遊牧の民を有する大平原の國々に於ては騎兵は戰爭中重大なる役目を果すことも出來やうが、ヨーロッパに於ては騎兵は小戰鬪、偵察亦は必要に應じて歩兵を援助したり、亦敵國を荒し、敵をして奔命に疲れしめ、其の糧道を切斷し、亦は敗退せる敵を追擊する場合には有效であるけれども、戰爭の運命を決するものはやはり歩兵である。此の歩兵の重要性を閑却して殆んど之に留意せず、全軍を騎兵に變更するの愚を敢てした故、祖國イタリーは荒廢に歸し、外國兵に蹂躪さるゝに至つたのである」と述べ、間接に歩兵の價値を力說してゐる。之は彼が繰り返し主張する處であつて、イェーンズ氏も確かに近代的戰術家の言であると賞讃してゐる。

然らば如何にすれば最も良き歩兵を得るかといふことに就て、彼は徵兵制度を力說してゐる。戰術論の第一篇に於て彼はコロンナの口を借りて「溫帶地方の人々を採用することが最も理想的である。何故ならば彼等は勇氣と愼重性を有するからである。之に反して熱帶は愼重ではあるが臆病な人間を作り、寒帶は勇敢ではあるが輕率な人間を作る」と述べてゐる。勿論此の法則は多少の眞理を有するかも知れないが、世界の支配者であればいざ知らず、やはり各地方の最も勝れた人間を發見して、古代ローマに於てなされた如く、大いに彼等を訓練することが必要であり、それは環境より遙かに重大な問題である。更に彼は兵士の肉體的資格に就ては「眼光鋭く、敏捷・快活で、首及び兩腕の筋肉逞しく、胸廣く、指長く胃は小に臀丸く、足は餘り脂肪が多くないことが理想的である—之等は何れも兵士に缺くべからざる力と輕快さを與へるものである。」と論じ、亦道德的資格としては「兵士が正直さと穩順さを持つてゐるかどうかを知るには彼

等の平素の習慣に對して深甚の注意を拂ふべきである」と述べてゐる。

次に歩兵を如何に武裝せしむかといふことに就ては「戰術論」第二篇に「ローマ式に武裝せしめた方がよろしい。ローマの歩兵は鐵で武裝し、楯と刀及びピルム(pilum)と稱する短い重い槍を携帶してゐた。反對にギリシヤ殊にマケドニヤ人は楯を持たない(之は彼の誤謬)が長さ一五呎以上のローマ兵よりも有利な槍を持つてゐた。然しギリシヤの密集隊(phalanx)はローマ軍には到底及ばない」と論じ、而も極めて詳細な點に對しては彼の論鋒は稍不明確になつてゐるやうである。恐らく彼の目的は古代ギリシヤと當代スイスの武器の類似を實證して其の缺點を指摘し、以てローマ的樣式に武裝した場合に於ける國民軍の優秀性を證明するに在つたと思ふ。元來スイス兵はギリシヤの密集隊を模倣し槍(pike)に力を注ぎ殆んど防禦的武裝をなさないのである。卽ち脊、腕、頭は殆んど防禦物なしである。而して極めて少數の者が斧の樣な尖をした六呎位の戟(halberd)を帶び、外に燧發銃を持つた少數がある。之等の歩兵が前述の如く騎兵に打勝つことが出來たので大いに聲價を揚げ、ドイツ人も之を模倣するに至つたのである。然しスイス兵は騎兵に對しては效果的であつたけれども、防禦的武裝が不十分であつたので接近した場所に於て戰ふために十分用意の整つた新手の歩兵と對抗することは困難であつた。之に反してローマ軍は甲冑に包まれ楯を持ち白兵戰の場合に於ける武器を有してゐた。更に彼はスペインの例を擧げ「スペイン兵は十分に武裝してゐるが近代的の有力な騎兵には及ばぬ。故にスペイン式歩兵に對抗し得る亦スイス兵の如く騎兵を擊退し得るローマ式歩兵を創設することが必要である」と主張して止まないのである。

次に軍隊の訓練に就ては「戰術論」第一篇に於てコロンナの口を借りて「一七歲—四〇歲までの强健なる男子は國防上常に一定の期間訓練さるべきである」と論じ、第二篇の劈頭に於てはローマ軍の訓練習慣を賞讃し「兵士を個々別々に訓練する丈けでは十分でない。彼等は亦大いに團體的に訓練されねばならぬ。特に重大な點は速か

に訓練に從ふことを欲する兵隊を養成することである。之は少數大勢の場合を問はず、又進軍中と雖も肝要なことである。殊に大軍の場合は地形又は敵の攻擊等のために列が混亂するかも知れない。かゝる場合には軍隊を速かに元隊形に復歸せしめることが最も重要な而も最も困難なことで、之は平素十分實習經驗を要する問題であつて、ローマは此の點遺憾なく訓練されてゐた」と述べ、更に第六篇に於て「古來東洋と西洋とを問はず多數が相戰ふことには可成り慣れてゐるが、東洋人は指揮者に對する尊敬の念により大體に於てよく之に服從するに反し、西洋人殊にイタリー及びギリシャ人の如き南方ヨーロッパ人は元來剛毅忍耐力を缺いでゐるから訓練によつて大いに其の缺點を矯正する必要がある。次に餘りに大軍を集中することは禁物である。何となれば其の場合には訓練は亂れ混亂狀態に陷るからである。ローマの習慣亦は現にスイスの實行しつゝある處に從へば、訓練に對する違犯者は彼等自身の仲間に依つて死刑に處せられる。之はまことに周到な策である。何故なれば違犯者は彼を處罰した人々から全く見放された者であつて、如何なる支持者をも有しないからである」と、訓練に就ては秋霜烈日の態度で臨むべきことを喝破してゐる。亦同篇に於て「毎年一、二回全軍を召集して戰時に於けると同樣に訓練、演習を行はねばならぬ。如何にしても理想的軍隊の條件は勇敢なる軍隊よりも寧ろよく訓練された兵隊といふことに在る。其の理由は若し自分が最前線の戰鬪員であるとしても、萬一敗北の場合替るべき訓練ある後續部隊が來ることを知つてゐるならば、自分はきつと秩序正しく而も勇猛果敢に戰ふであらう」と述べて訓練ある統制ある軍隊を讃美してゐるのである。

次に軍隊の編成法に就て「戰術論」の第二、第三、第六篇に述べる處を綜合すれば大體次の通りである。

あらゆる軍隊は其の集團的訓練のために步兵本部隊を必要とする。ローマは軍團（legion 四五〇〇名—六〇〇〇名）、ギリシャは密集隊（phalanx 四〇〇〇名、後約四倍に增員）、スイスは步兵大隊（battalion 六〇〇〇名）を有してゐるが我々も斯の如き實例に從ふべきであるとな

し、歩兵本部隊（battalion 六〇〇〇名）を一部はギリシヤ式、大部分はローマ式に編成し、其れを更に一〇の部隊（ten companies）に分類する—恰もローマの軍團が一〇の歩兵隊（ten cohorts）に分たれた樣に。次に各部隊（companies）は四五〇名の歩兵から成り、其の内一〇〇名は槍、三〇〇名は劍と楯を以て武裝する。此の槍兵隊一〇〇名は二〇名づゝ五列に並び最前線を占めるのである。殘りの五〇名は燧發銃や弩弓等で輕裝する。以上一〇部隊四五〇〇名であるが殘餘の一五〇〇名は敵の騎兵を防ぐために歩兵遊擊隊（extra foot soldiers）として味方を掩護する。其の内一〇〇〇名は槍を持つて本部隊の兩翼に配置され、五〇〇名は更に其の兩翼となる。彼は此の歩兵本部隊（battalion）四を以て正規軍を組織する。卽ち四〇部隊、四遊擊隊、總數二四〇〇〇名に達するわけである。二〇部隊を先鋒に一二部隊を其の直後に—此の中央部隊は萬一先鋒が破れた場合に之を收容し得るやうに稍分散の隊形をなす。殘りの八部隊を後衞に—之は先鋒、中央部隊を收容するために一層分散の隊形に配備される。更に歩兵の外に一六〇〇名の騎兵を兩翼に、砲兵隊若干を正背面に配置する。彼に依れば餘りに大軍を擁して戰線を擴大せしめることを好まない。如何に特種の場合でも五萬を越えなかつたローマ軍がよく二〇萬のゴール人を征服することに成功したと同樣に近代人も亦之を模範とすべきであると主張してゐる。

以上彼の軍隊組織を仔細に檢討すれば、恐らく彼自身も次の點に矛盾を感ずるであらう。卽ち其は彼がローマ式に倣つて防禦よりも攻擊に便利な歩兵にのみ信賴してゐるといふことである。勿論彼は敵の騎兵の襲擊に頭を惱まし、軍の主力の周圍は前述の如く精鋭なる槍兵を以て防備を施したのであるが、此の點スイスの歩兵には見られない特徵である。之を要するに彼は將來歩兵の重要性を認識してゐる一方、當代の騎兵の演じた重大な役割をも認め、之に對する最良の對策を考究せざるを得なかつたのである。故に結局彼の軍隊はスイスの歩兵の積極的改良であると言ふことが出來る。此の點に就ては有名なイタリーの參謀將校ヴァレンチノ・キャラ（Valentino

Chiala）氏もマキアヴェルリの軍隊は其の融通性、移動性、輕快さといふ點に於て遙かにスイス兵を凌駕してゐると賞讃の辭を述べてゐる。

次に「戰術論」第三、第四、第五篇に於てはローマ兵を引用して全軍の取扱ひに就て述べてゐる。此處では彼は自身の體驗に立脚して述べることは殆んど稀である。それは彼が大戰爭なり大演習を眼のあたり觀たことが無かつたからであらう。彼が特に力を入れて述べる點は「戰鬪中若し敵が側面攻擊に成功するならば味方は先頭部隊を移動せしめることが困難であるから、遂に全滅するに至る。最前線が退却せねばならぬ場合には一般に混亂狀態に陷るのみで施す術もないのである。故にかゝる危期に直面しては先頭部隊の移動變更を敏速容易ならしむべく平素の訓練が絕對に必要である」といふにある。此の點はナポレオンも同樣のことを述べてゐる。尙味方の軍が若し騎兵を有しない場合には、彼に依れば出來得る限り樹木や葡萄園等の間に軍を配置すべきであると述べ、亦敵の最も薄弱な部分に對しては味方の最も有力な部隊を用ゆることが賢明な策であることを力說する。之は歷史上偉大な將軍がよく實行した戰略である。其の他彼は軍事上のことに關しては特に絕對祕密主義を勸告してゐるのである。

四　火器の重要性に對する認識不足及び城砦構築に關する見解

マキアヴェルリが火器の急激な進步を豫知し得なかつたことは、如何にしても彼の大なる誤謬であつた。而も彼の時代に於ては火器は未だ軍隊編成の根本的改革を促す程に發達してはゐなかつたのである。事實科學的戰術は未だ知られず想像さへされてゐなかつたに拘らず、彼は兎も角も敢へて戰爭科學の創造を試みた最初の人であつた、と云ひ得る。それに就てはイタリー近代の歷史家として有名なバスクァーレ・ヴィラリ（Pasquale Villari）氏も「自分は友人カール・ヒルブランド敎授（Professor Karl Hillebrand）の厚意に依つて戰術家として著名なるプロシャの陸軍參謀少佐イェーンズ氏に二、三の質疑をなし

た處、氏は軍事專門家としてのマキアヴェルリ（Machiavelli als militärischer Techniker）なる論文を示され亦我がイタリーの陸軍參謀少佐キァラ氏も幾多の質問に對して懇切に說明され兩者何れも戰術家としてのマキアヴェルリに絕大の讃辭を呈して居られる」と述べてゐる。

マキアヴェルリが軍人でなかつたことは云ふまでもないが、而も此の事實は寧ろ彼の戰術觀の價値を一層高めるものであり、却つて彼の天才を立證するものであると同時に、亦之が彼をして誤謬を犯さしめたのであるとも考へられる。彼は火器に殆んど信賴しなかつた。「ローマ史論」の第二篇第十二章に於ても「大砲は城壁や包圍された場所に於て防禦する敵軍に對しては效果的であるが、平地亦は進軍中の敵に對しては殆んど役に立たぬ。而もローマ人が嘗て我々に實例を示した如く戰爭は防禦よりも攻擊を遙かに得策とするに於てをや」と述べてゐる。「戰術論」の中に於ても彼は決して此の意見を變更しなかつた。卽ち第三篇に於けるコロンナとアラマンニとの大砲戰に關する問答に依れば、今敵軍と相對峙してゐると假定し、コロンナは味方の軍の總指揮官たる重責にあるとする。味方の銃砲は煙硝の製造以外には殆んど效果無しに發射されてゐる。稍あつて味方の輕騎兵が前進し散兵線を作つて敵を襲擊する。敵の砲兵隊は旣に砲火を開始し彈丸は味方の步兵の頭上を飛んでゐる。槍を持つた味方の步兵が勇猛果敢に敵を擊退する。此の步兵はいよ／＼白兵戰になると槍と楯を持つ味方の步兵に後を讓つて退却する。交代した步兵は遂に首尾よく敵を敗北せしめる。此の戰鬪狀況に對してアラマンニは熱心に而も詳細に反問する。卽ち「何故に味方の砲兵隊は單なる一齊射擊の後沈默したか。次に敵の砲彈が味方の頭上を飛ぶ程に何故敵を看過接近せしめたか。事こゝに至るまでに適當な方法を講ずべきではなかつたか。亦舊式の武器戰法は今や蔑視され殆んど重要視されてゐないことを聞いてゐる。何故ならば古代の武器戰法は敵の心膽を寒からしむる偉力を有する大砲に對しては今や全く無力であるから」と。之に對してマキアヴェルリの代辯者コロンナは答へて曰く「味方の銃砲に依て敵に損害を與へる

よりも、敵の砲撃による損害を避けることが一層重大であるから單なる射撃のみに止めたのである。かくして散兵線を作つて極めて敏速に敵の砲兵隊に進撃することが必要である—敵の砲兵隊をして砲門を開く餘裕なからしむべく亦敵をして此の散兵の進撃隊のみに注意を集中せしむるために。事實自分は單なる一齊射撃を開始することに對してさへ躊躇したのである。何故なれば銃砲の煙が敵影を眼界から遮ることを恐れたからである。勿論敵の砲彈が味方の頭上を飛ぶのは覺悟の前である。何故なればそれは戰鬪に於て常に起り得ることであるから。事實大砲の取扱ひはまことに困難なものであり、若し少しでも高く目標を定めると砲彈は敵の頭上を通過し、亦反對に多少でも低くすれば、地面に衝突するに至る。故に大砲は一般的戰鬪に於ては全く無益である。或る人々は古代ローマの戰法を以て大砲に對しては無效であると主張するが、それでは新式の戰法が確かに大砲に耐へ得ることが發見されたかと云へばそうではない。自分は未だ嘗つて其の實例を觀たことがない」と、卽ち大砲の效果の無力を主張してゐる。而も彼は嘗て一度だけ大砲の價値を認めて「戰術論」の第七篇に「狂暴性(大砲の偉力)がまことに大であるから、單なる城壁では之に對抗することは出來ない」と述べてゐる。

想ふに當時に於ては砲術も甚だ不完全であつたから、或ひはマキアヴェルリが錯覺に陷つたのも一面無理からぬ點があつたと思はれる。然し前にも述べた如く大砲の威力を十分に豫知することが出來なかつたことは如何にしても彼の戰術觀の一大缺點であつた。何故ならば彼は一五一二年のラヴェンナ(Ravenna)の戰鬪、一五一三年のノヴァラ(Novara)の戰鬪、一五一五年のマリニャノ(Marignano)の戰鬪等幾多の實例を知つてゐる筈である。之に就てはキャラ氏も「一五一二年ラヴェンナの戰鬪に於ては大砲は未だ十分なる效果を示さなかつたから先づ大目に見るとしても、一五一五年マリニャノの戰鬪後に於ては早彼の錯覺はいよ〳〵見逃すことは出來ない」と述べて彼の錯誤を指摘してゐる。然らば何故に彼が大砲を輕視したのであらうか。それは第一に彼が軍事

的體驗に乏しかつたこと、第二に彼が餘りにも國民歩兵軍の組織のみに熱中して他を顧る餘裕がなかつたためであると思ふ。一五一二年のラヴェンナの戰の時には彼はフローレンスの防禦準備に餘念がなかつた。一五一三年のノヴァラ、一五一五年のマリニャノの戰鬪の時は既に彼は閑地について田舍に隱退してゐたのであつて、之等の事件の反響のみが友人達の口から僅かに彼の耳に入つたに過ぎなかつたのである。從て彼は云はゞ一五一二年ラヴェンナの戰鬪以前の軍隊及武器を理解してゐたのであつて、彼の軍事に對する見解は一五一二年以前の狀態の儘で之を完成せんとするに在つたらしい。若し彼が軍人であつたならば、彼の時代に起つた大戰鬪に關して正確な具體的知識を得る機會を見出したであらうし、亦砲術の如き複雜な武器の改良は實に測り知れないものがあることを明かに豫知し得たであらう。而も彼は當時の戰術亦はその改良に就ては理論的、科學的說明を試みた最初の人であつたと云ふことが出來ると思ふ。銃砲の實に恐るべき急激な進步がなかつたなら、戰術の理論的發展は必然的に彼が指示せる道を辿つたであらうし、彼の戰術の實際的價値は著しいものがあつたに相違ない。—現代に於ては歷史的見地からのみ尙興味ある問題ではあるが。

「戰術論」の最も重要な部分は最終篇たる第七篇に含まれてゐる。その中に彼は城砦構築に關する意見を述べて最後の數頁を飾つてゐる。それは當時に於ては實に價値と創造性に富んだ卓見であつた。元來イタリー其の他の諸國に於ても防禦工作に就ては注意を拂つて來たが、大砲の利用によつて築城術は一大變化を來すに至つたのである。從來の高い古壁は大砲のために容易に破壞され、亦其の上に銃砲を運び上げることが出來なかつたから敵に打擊を與へる役をなさなくなつたのである。故に餘り高くない從前よりも嵩張つた塊狀のものを構築して其處に巨砲の砲門を設けることが必要となつた。然し若し防壁が餘りに低ければ梯子等でよぢ登ることが容易である。彼は之等の點に就てはスペイン軍侵入に對するフローレンス(Florence)、プレートー(Prato)等の防禦工作で

多少の經驗を積んでゐたのである。從來のフランス式の壘壁は敵の銃砲を防ぐために其の內側に土砂を堆積したが、之は一つの重大な缺點を持つてゐた。卽ち此の種の防壁は砲彈が命中すると土砂の俄雨と共に外側へ落下するから防壁外の堀は土砂に滿され、此處に敵が砲彈を集中して一層猛烈に防壁を破壞するに至る。故に彼は此處に新しい方法を提供する。卽ち一五〇〇—一五〇五年に於ける前後二回のピサ（Pisa）の戰鬪其の他に於て彼は此の缺陷を熟知してゐたのである。彼に從へば多くの稜堡を有する二重の高い壘壁を廻らし、其の間には廣大な塹濠（廣さ六〇呎、深さ一二呎位）を構築する。而して外壁は少くとも六呎の厚さを有し稜堡は四〇〇呎の間隔で設けるべきである。亦此の防壁は從來の如く外側の代りにその內側に堀亦は塹濠を有し、塹濠には四〇〇呎の距離で陰砲臺を設置する。而して塹濠を作るために掘られた土砂は內側の防壁に近く堅固な臺場を築くのに利用する。此の臺場は兵隊を隱しておくのに都合のよい樣にかなり高く作り、此處にも敵に備へるために重砲を配置する。更に彼に依れば若し萬一外壁が破壞された場合には砲彈が例によつて土砂と共に外側へ落下するから、其處には次第に高くなる所の壘壁を敵彈が築いてくれることになる。從て敵は先づ最初に此の新しく出來た壘壁にそれから外壁、次に塹濠、最後に重砲を以て掩護された內側の防壁に直面しなければならない。彼は亦外壁から一定の距離に堡壘を設けることに反對する。何故なれば、若し之等が敵の手に陷つた場合、城塞も亦征服される危險があるからである。從て城壁から少くとも一哩の間は展望が利くやうに平垣でなければならぬと說く。此の見解は當時に在つては確かに新しい獨創的なものであつた。

其の他防壁に設けた銃眼、城門に吊して敵の侵入を防ぐ吊戶（ツルシド）亦は墜格子（オトシゴウシ）、大砲輸送用の貨車、開橋（ハネバシ）等の改良に就ても實際に卽した正確な觀察の下に之を考究してゐる。

五　結　語

最後に彼の軍事上の格言心得とも稱すべき點に就て述

べることにする。卽ち「敗退する敵を無秩序に追擊する者は勝利者の地位から被征服者に轉落することを欲する者と云はねばならない。亦敵に依て看破されたことを知つた場合には勿論其の計劃を直ちに變更すべきである。不意の出來事は之を救濟することが困難であるけれども、豫知されたことは之に處することが容易であるからである。人・劍・金、而してパンは實に戰の鍵である。而も最初の二つは最も必要なものである。何故ならば人と劍は金とパンを得ることが出來るからである」と喝破してゐる。

以上まことに不徹底なことを述べ來つたが、之を要するに本稿の目的は彼が單に近代的政治家として光つてゐるのみならず、亦近代的戰爭科學への橋渡しをなしたる人物として、戰術史の頁を飾るに足る偉大なる歷史的存在であつたといふ點に特に諸賢の御一考をわづらはしたい念願に外ならないのである。